

菊池 康之氏を偲んで

平成8年9月20日、原研核データセンター室長菊池康之氏(55歳)が逝去されました。菊池さんは昭和44年東京大学原子力工学科博士課程を終了された後、米国アルゴンヌ国立研究所、フランスのサックレイ研究所での研究員生活を経て、昭和47年4月に原研核設計研究室に入れ高速炉の炉特性解析法の研究に従事、その後51年に物理部原子核データ室に移られて以来、核データセンターで JENDL 作成とベンチマークテストによるその検証及び普及に努めてこられました。この間、JENDL に関係して2度の日本原子力学会賞受賞の榮譽に輝いております。昭和60年からの3年間、本部企画室での活躍の後、核データセンターに戻られ平成元年に室長に就任しました。今後益々の活躍が期待されただけに、菊池氏が逝ってしまったことは核データのコミュニティーにとっては大きな痛手となっております。ここに、菊池氏への追悼文を載せ、彼の人物や業績を偲び、ご冥福を祈りたいと思います。なお、紙面の都合で執筆者の数を限らせて頂きました。(編集委員会)



菊池康之君の死去を悼む

法政大学
中嶋 龍三

シグマ委員会において菊池君の熱弁を最後に耳にしたのはおそらく昨年(平成8年)の2月頃ではなかったかと思うが、それから約半年後に突然彼の訃報に接して非常に驚いた。核データの分野における生前の彼の存在があまりにも華やかだっただけに、このことはシグマ委員会や核データセンターのみんなにとってはとても衝撃的なことだったと思われる。そしてシグマ委員会の一員である私としては、口角泡をとばして独特の大声で論陣を張る菊池君がもう二度とシグマ委員会の席に戻ってこないのだと思うと、なんだかとてもやりきれない気持ちに駆られる。

菊池君は東大原子力工学科の大学院博士課程を修了した後に、アメリカのアルゴンヌ研究所及びフランスのサクレイ研究所で3年間ほど研究生活を送った。若い時代のこの在外研究生活は、その後の彼の原研における活躍のきわめて大きな礎石となったことは彼を知る多くの人たちのひとしく認めるところであろう。サクレイ研究所にいたときには菊池君はおそらく、サクレイの若武者といわれた Ribon というリニアックによる実験及び中性子データの評価分野の新進気鋭と親しくしていたのではなかろうかと、私はかねがね推測していた。というのは、この二人はその粘り強さ、積極性、社交性といった性格の点でも、あるいは物怖じせずと大声で早口にしゃべりまくるといった振る舞いの点でも本当によく似ていたからである。私はいつも、菊池君を見ていると Ribon の面影が重なり、Ribon と話していると菊池君としゃべっているような気になったことを思い出す。われながら不思議に思っているのだが、このような錯覚を一再ならず経験したように記憶している。粘り強さ、積極性、社交性というのはまさに菊池君の顕著な特性であり、これによって彼は広い国際的な核データの舞台で大きく羽ばたいたのではなかろうか。

核データセンターにおいては菊池君は初めから JENDL 作成に携わっていたが、どちらかというベンチマーク・テストによるライブラリーの検証という部門で、彼独自の鋭敏な洞察力を養ったのではないかと思われる。ミクロの評価値が積分実験にどんな効果をもたらすかということを実によく把握していて、ライブラリーの検証に際して素晴らしくよい見通しを披瀝する菊池君の才能にはしばしば感嘆させられたことである。いつでも彼の意見が常に正しいとは限らないことは当然であるが、しかし彼が胸を張って相手と論じあえるということは相当の自力をつけており、また同時に自己の主張に強い自信を彼がもっていることの証拠に他ならない。

シグマ委員会は今まさに、新しい発展の第一歩を印すべき大きな節目に立っている。この大切な時に強力な牽引車となるべき菊池君に先立たれたことは、核データセンターとしてもまたシグマ委員会としてもまことに残念なことといわなければならない。しかし神が、活力旺盛でしかも見た目には派手な地上の花を手折って天上に移し飾ったのだと考えれば、われわれ残された者の悲嘆もいくらかは和らげられよう。

菊池君、さようなら。どうか安らかにやすみ下さい。

菊池さんとの思い出

大分工業高等専門学校

神田 幸則

此処に、9才も年上の私が、菊池さんの追悼文を書く無念が胸をよぎります。しかし、この際、後に残った者が、故人との思い出をみんなで共有することは、菊池さんの御冥福をお祈りすることになるとの思いを込めて書き綴ります。内容も、核データ評価や国際的活躍については周知のことですので、出来る限りそれらの周辺の思い出に致します。いきおい、私自身との思い出が中心になりますことをご容赦願います。

平成8年9月20日の朝、日本原子力研究所核データセンターからの連絡で、同日午前1時頃、同センター室長の菊池康之氏が逝去されたことを知りました。一瞬、大きな戸惑いを感じました。それまでお聞きしていた菊池さんの病状から、私は彼の病が死に至る病であるとは全く認識していなかったからです。何れ又彼の元気な姿に接し、懸案になっている共通の課題を処理しなければならないと思い、その日がいつ頃になるかとの観点からのみ、菊池さんの病状を伺っておりました。しかし、後で知ったのですが、検査の結果では、今回の結果が予測出来る病状であったようです。

菊池さんは、何にでも関心を持ちかつ徹底する性格でしたから、自分の健康管理もその例外ではありませんでした。思い出すと、彼の病気は相当以前から徴候があったのではないかと推察いたします。何年前かに福岡にお出での際に、精密検査のために要求されるて居るとの理由で、厳しい飲食の制限を自分に科していました。飲食への関心も強い彼を知っている者にとっては、意外な程の徹底ぶりでしたので強く印象づけられました。その後、その検査結果は良好で、以前の彼に戻りました。その検査対象は、菊池さんを死に至らしめた場所に近いがそれ自身ではなかったと記憶します。彼自身には或程度の自覚症状があっても、医学的に初期発見が出来ずに時間が過ぎて、重大な結果になってしまったのだと思います。

菊池さんと最初にお会いしたのは、シグマ委員会の会合であるのは確実なのですが、何時でどんな状況であったかは記憶にありません。ただ、初期の会合で、この時は既に彼は核データセンターの一員であったのではなかったかと思いますが、机をたたく大喧嘩をした覚えがあります。この件は、相当激しかったのですから、同席されていて未だに記憶されている方がおられるはずです。内容は全く覚えていません。重い核の評価に関することだったのでしょう。場所は、旧東電の会議室で、壁には現在原研本部第二会議室に無造作に放置されている油絵が掛かっていました。全く研究上の議論でしたから、これが彼との関係に尾を引くようなことはありませんでした。ただ、後年、「若い頃は、

神田さんが怖かった」とニヤニヤしながら言っていました。彼は真面目で真摯に問題に取り組み、積極的に意見を言い、妥協しない性格だったから、単純な私とよく言い合いになりました。この様な彼の性格が、後年、国際舞台で活躍出来た要素の一つでもありました。欧米の参加者の資料の不備を言葉激しく、勿論英語で、なじったことがありました。座が白け、直接の原因になった一人が詫びて、コーヒブレークになりました。エクス・アン・プロバンスでの会議のことです。今も、会場となったホテルのプールに反射していた南フランスの陽の光が目には浮かびます。その時、「Yasuyuki は Samurai だ」と Fröhner (KfK)に評されたそうです。その後、この Samurai の話は彼から何回か聞かされることになるのですが、そこがまた、菊池さんらしさを感じさせるのでした。

菊池さんの研究生活の出発は核データでした。しかも、原子炉物理、原子炉工学を修めた上での核データという経歴は、直接核データ分野に入ったのではない私と考え方が違って当然でした。「当然」と思うようになったのは、彼が居なくなると、彼とのことをあれこれ考えるようになってからです。残念ながら、今となっては、確かめる術がありません。私が一方的に、核データ評価の具体的問題で彼と論じた記憶を基に出した結論です。菊池さんは、国の内外を問わず JENDL の宣伝普及に、情熱を傾けていました。核データセンター室長の立場からは当然なのでしょうが、私にはそれ以上のものがあつたように感じます。JENDL を越えて、核データライブラリーそれ自身に対する情熱だったようです。従って、ENDF/B にも JEF にも、私の考え方とのズレがありました。その感覚、考え方が、最近の核データ国際協力での活躍につながっています。菊池さんの会議でのテーマ提案は、質の上でも数の上でも群を抜いていたと理解しております。内容に対して、そこまでしなくとも、又は、そんなにしても、と私はってしまう提案がありましたが、結局みんなが納得していました。上にも書いた彼の積極性による所があつたとは思いますが、核データに対する認識、核データ評価に対する考え方が共感を呼んだのでしょう。

私の手許に、炉物理国際会議 PHYSOR'90(マルセーユ、1990)でのレセプションのスナップ写真があります。左側には私の横顔も写っているので、「For your memory」とのことで当会議を主催した Dr.M.Salvatores(CEA Cadarache)から私に送られて来たものの一枚です。この会議は、主催者の個性があふれていた会議だったとの印象を強く持っております。故人は、この Dr.Salvatores に畏敬と憧憬の念を抱いていたと、私は想像しております。この想像を故人に確かめたことはありませんでしたけれども、「彼のように、何事にも aggressive な人物は、日本には居ないですね」との彼の言葉を思い出すのです。この言い方の中に、Dr.Salvatores をご存知の方は勿論ご存知の無い方も、私の推察をそれなりに理解して頂けると思います。

菊池さんとは、国内外で大変多くの会議で一緒でしたが、変な言い方かと思えますけれども、煩わしいと感じたことはありません。お互いの行動にけじめを付け易い関係を、違和感無く持続出来ました。例えば、会議のない時間や日に何処かに一緒に行った記憶は、共にした会議が多かった割には、極めて少ないのです。私自身は、単独行動を好む方ですので、こんな結果になったのかと想いますが、故人もその傾向が強かったのではないかと思います。しかし、珍しく一緒したのが、マルモッタン美術館でした。1995年5月パリ郊外 NEA 本部での評価国際協力会議に出席した時でした。印象派の名称の発端となったモネの絵があるところです。思えば、これが菊池さんと一緒した最後の国際会議です。

上に書いた例外、それは夕食を共にすること、不思議とこれは共に煩わしく無く、多くの記憶が残っております。二人共、飲食に関心が強いからと言うことなのでしょう。菊池さんと私が二人だけで食事をした最初は、古い時代、未だ余り親しい間柄ではなかった頃だと思います。東海村で彼が「一人で夕食をするのは寂しいでしょうから、一緒しましょうか」とのことで、今は無い店で焼肉をつついたのが最初でしょう。菊池さんは、未だ独身でした。又、彼がエビ類を好むことを知り、詳しい知識を披露されたのはアントワープの夜でした。ムール貝で有名な店が満席で、二人で近くのレストランに入ったときです。もちろん、ムール貝の店には、翌日きちんと参りました。当然、食事にはワインが付き物ですが、彼はブルゴーニュ産を好み、暇があった時と断っておりましたが、お世話になっている当地方にわざわざ出かけオリジンを訪ねたと言っておりました。その徹底ぶりというか、オリジナルへのこだわりは時には微笑ましくさえありました。福岡に来ればフグを志向し、鯖の刺身がおいしいよと言っても箸を付けませんでした。鯖は、関東では危ないものとなるのでしょうか、九州では新鮮で美味しい魚で刺身は当然なのだと説明しても首を横に振りました。以外と冒険をしませんでした。Agressive を旨とした彼にしても保守的な面もあったんだなと思うのです。そして、関西は「けつねうどん」だと、神戸での学会の昼食を選んでいたのも、懐かしい思い出になってしまいました。

菊池さんとは、平成8年1月19日の昼に九州大学で分かれたのが、最後になってしまいました。集中講義をお願いして、福岡に来て頂いたのです。丁度、私が停年退官する直前で、それを記念して九州大学関係者に企画して頂いた研究会の最終日でもありました。

この後、お母様と菊池家の出身地熊本県菊池市を訪れるとのことでした。ご家族思いの菊池さんから、奥様とお嬢様とのアメリカ横断旅行の話、奥様とのパリ旅行の話もお聞き致しました。奥様とパリにおいでの際、丁度交通機関のストライキがあり不自由したのみならず、掃除もされずに汚くなった駅でお二人が閉口した話を伺いながら、その

駅から列車に乗ったのも彼と最後のパリの時でした。

平成8年10月11日、菊池さんの論文(V.M.Maslov との共著)Systematic Study of Neutron Induced Reactions of The Actinide Nuclei(JAERI-Research 96-030, June,1996)が私の手許に届きました。彼との懸案の課題は、この延長線上で解決する筈だったのです。しかし、今はその相手が、私の声の届かない所に行ってしまいました。

菊池さん、安らかにお眠り下さい。

菊池君を悼む

元核データセンター室長

五十嵐 信一

先日たまたま菊池君の「中性子核物理研究施設の概要」と題する JAERI-Conf-96-014 の彼の研究会レポートを読んだ。おそらくこれが彼の最後のレポートと思われる。書いた時期は分からないが、入院する直前ででもあったであろうか、体調が良くなく、優れぬ気分で書いたであろうと想像し、心が痛んだ。

思いもよらぬ彼の重病を知ったのは昨年(1996年)の6月下旬で、大変驚き、早速見舞いに行ったが、表面上はともかく、大変なことになっていることが分かり、何とも遣りきれない思いであった。前年の核データ研究会では、懇親会の後私の宿舎にきて、NEANSC のことなどを熱っぽく話していて、病魔が忍び寄っていたなどとはとても思えなかったが、あの頃すでに体調が思わしくなかったとのことであった。今、私の部屋には1994年の3月に私が東海村を去るに際して核データセンターの諸君が送別会をしてくれたときの写真が飾ってあるが、その中の菊池君を見る度に何故こうも急いで逝ってしまったのかと問いかけ、そうして、彼と最初に会った約30年前からのことをいろいろと思い出して、元気な頃の彼の面影を偲んでいる。

確か安先生に連れられてシグマ委員会の私たちの作業グループにきたのが私たちと接触した最初で、当時彼は大学院の学生で、怖いもの知らずであった。私との関わりはこの頃から可成り強かったように思う。きっかけは何であったかは思い出せないが、プルトニウムの共鳴データを一緒に調べたことがあり、それを1966年の核データ研究会で彼が報告した。この時の調査が彼の学位論文のきっかけになった経緯がある。

もう昔のことだから言っても良いと思うが、彼がこの論文を原子力学会誌に投稿した時の査読者の一人が実は私であった。当時彼はすでにANLに留学していて、投稿もその直前にしたものだから、原稿がいささか乱れていた。当然いろいろとコメントを書い

て返した事を覚えている。再査読は勿論問題なく通った。

その後、私が 1971 年に Saclay の CCDN (中性子核データ編集センター、現在の NEA データバンク) に行った折り、P.Ribon 氏のもとに留学中であった彼はこの事に触れ、査読の筆跡をみて私であることがすぐに分かった、と言って「原子力学会が査読者の名前を隠しても筆跡で分かるんだから駄目ですよ」、と笑っていた。

帰国した彼が原研東海研に入所し、原子炉工学部の核設計研究室に所属しながら核データセンターの我々と常に接触し、やがて核データセンターの一員になり、良きにつけ悪きにつけ、彼と一緒に研究生活を送るようになったのも、こうした昔を思い出すと初めから約束された宿命であったのかも知れない、などと思われるのである。JENDL に関する活動では様々な思い出があり、とても語り尽くせないが、一度だけ、あるいは彼との決定的な決別になるかも知れない事があった。それは 1984 年度の原子力学会賞を JENDL-2 の完成で授与された頃で、彼はその受賞者の一人であったので、この件に関して不満があったとは思えないが、私などの知らない筋を通して核データセンターを出て企画室へ行くことを希望したらしく、私は当時の原田部長に呼ばれ、彼の配置替えについて決断を迫られた。その当時は JENDL-3 の作業を計画中であり、また、核データの国際会議を開く準備が始まった頃でもあったので、彼に抜けられては困る状態であった。突然のことではあり、非常に困惑したが、すでに事は決まっていて、結局彼は企画室へ行くことになった。シグマ委員会の何人かからは「敵前逃亡だ」などと言われ、私も可成り非難されたものであった。

しかし、後になってこの事がかえって私にとっても核データのコミュニティにとっても幸いしたのだから分からないものである。つまり、彼が企画室に行ったことによって、企画室や役所の意向が彼を通してこれまでよりも詳しく分かるようになり、核データの活動方向や国際会議の準備などに大変良い効果があったのである。企画室行きはあるいは彼の深慮遠謀であったのか、今となっては当時の彼の心中を聞くわけにもいかないが、常に彼は核データのことが頭から離れず、有益なアドバイスをしてくれたものであった。

1988 年の国際会議直前には再び核データセンターに戻り、翌年 10 月に私の定年退職にともなって核データセンター室長になり、私がやり残した諸々の仕事を引き受けさせられ、定めし迷惑であったであろうと申し訳なく思っている。その諸々の仕事の中でもとりわけ大きく、難問であったのは、国内では JENDL-3 以後の核データ活動をどうするのか、国際的には JENDL、ENDF/B、JEF/EFF の評価協力が合意はされたが、具体的な作業の進め方をどうするのか、と言うことであった。彼がこれらに対してどのように対処し、いかに見事な指導振りを発揮したかについては核データニュースの各号に紹介されている通りである。

これらに加えて、その後の原研の組織替え、OECD/NEA の改革、ソ連の崩壊に伴う

国際協力の拡大と複雑化など、1990年代に入ると内外ともに多忙になり、外国出張も多く、健康管理が些か疎かになったのかも知れない。もともと健康には注意している方の彼ではあったが、外国に行くと武勇伝も多い方であった。帰国後のみやげ話もワインをはじめとするアルコール類の話と食べ物の話が得意であった。話の面白さは面白さとして、少々気になって注意したこともあったが、体調が悪いとすぐに医者に行く用心深さもあった。特に肝臓の調子には気を使っていたのだったが・・・

核データに限らず、最近の世の情勢は厳しさを増すばかりである。この様な時に彼のような、ある面では強引な、しかし用心深さも持った指導者を失ったことは大変残念である。ただ、今後の核データ活動の発展こそ彼への最大の供養になるものと思う。

ご冥福を祈る。

天国にて、きちんと相談しましょう

東京大学大学院工学系研究科システム量子工学専攻

中沢 正治

人生にとって一番大切なものは、「夢と希望」であると思うようになったのは、年齢のせいかなと思うことがあります。北大を訪問すると、いつもクラーク博士の"Boys Be Ambitions"を思い出しますし、学生さん達に贈る言葉も、最近はいつも「夢と希望を持って」と言っていることに気が付きます。きっと、自分自身に言い聞かせているのだろうと思います。

「夢と希望を持って」と言われている頃は、逆に言うと、それどころでは無かったし、やる事が具体的にいっぱいあって、言われても「ハイハイ」と聞き流していたことを思い出します。今、私が、学生さん達の受け止め方もそうであるとは知りつつも、つい言うってしまうのは、もはや私の性分なのだから仕方がないと、学生さん達も分かってくれているようです。

菊池さんのお見舞いに、日本医大に伺ったときも、きっと私は、このことを繰り返していたのであろうと思います。菊池さんは、それに答えてくれました。「ひとつ頼みがあるんだよ。東大出版会に掛け合って、本の出版を頼んでおいてくれないかなあ。退院したら、もう室長の激務はやめて、ゆっくり出来るだろうから、核データの本を出したいんだよ。一緒に書かないか。」と例の口調です。

「OK、やっておくよ。学生の教科書にできるのを書こうよ。」と答え、大学に戻っ

てから、東大出版会への頼み方を調べ始めておりました。夏休みになって、回りの人に菊池さんの様子をいろいろ伺いました。その本の相談に行ってもよいものかどうか？その本の計画は、菊池さんが私を頼りにして下さった、そしてその後の人生のスタートの「夢と希望」のシンボルとして、私の中に残したまま、逝かれてしまいました。

きっと、これから本の出版の相談をしていたら、必ず、飲みながらになったに違いありません。そして多分、話はいつも発展して人生の無限さと多様さを楽しみながら「次はきちんと相談しよう」と言っていたに違いないと思います。この続きは、いつか天国でやろうと思っている次第です。

合 掌

菊池康之氏を偲んで

東芝（株）

川合 將義

私が菊池さんを初めて知ったのは、昭和 43 年の秋、Pu239 のアルファ値（核分裂断面積に対する中性子捕獲断面積の比）についてのインフォーマルミーティングか中性子断面積研究会の懇親会の時であった。当時、私は故飯島俊吾氏の下で NAIG での高速炉核設計用の群定数を作っており、Pu239 を手がけていた。彼は、東大の安先生の下で核分裂の理論を研究していてチャンネル理論で U235 と Pu239 の断面積の計算をしており、議論での自信に溢れた意見陳述が印象的であった。そして、学会の欧文誌に載った彼の核分裂幅の計算結果は、私の仕事に参考となった。その後、彼は米国 ANL とフランスの Saclay 研究所でますます磨きをかけて原研に入所された。入所直後の仕事は、高速炉臨界実験値の解析が中心であったが、シグマ委員会の核データ評価専門部会の私と同じ WG（重核核データと FP 核データ）にも参加され、JENDL-1 の仕事を一緒にやることになった。いわゆるベテランの多いシグマ委員会の中での若手グループの中では、兄貴分的な彼は、みるみる内に頭角を現し、委員会全体を引っ張っていく存在になった。重核のデータでは、Pu241 を担当された。また、FP の核データは JENDL-1 用の 28 核種の第 2 次評価が始まったところで、評価とともに ECN やフランスのライブラリーとの比較検討に取り組みされた。頭脳明晰な彼は、それらの仕事の本質を看破し、自分の担当をたちまちのうちにやり遂げられた。この成果により、五十嵐氏、故飯島氏とともに日本原子力学会の技術賞を受賞された。

JENDL-1 は、部分的に ENDF/B-IV からの借り物が含まれていたのと、積分テストの結果が必ずしも十分な精度を与えるものでなかったため、まもなく JENDL-2 の作業が始まった。それと前後して核データセンターの前身である核データ研究室に移られたように思う。核データセンターの中では、積分テストが真にわかる人として、評価者と利用者の橋渡し役として貴重な存在であった。評価の仕事では、Pu241 と FP 核種に加えて、構造材の共鳴パラメータや非弾性散乱断面積の評価も担当され、全うされた。重核データでは、U-235 や Pu-239 等の主要核との同時評価が主題であり、データの採取から最後のまとめ段階に至るまで、喧々囂々の議論を行ったものである。10 行の英文要旨を書くのにも半日費やしたこともあり、それへの発言力も高かったように記憶している。その原案は、Keyword が残っただけで、全く面影を留めなかった。FP については、もっとも労力を要する共鳴パラメータを共に担当された。しかも、彼は、Mo, Tc, Ba から Pm までの核分裂収率が高く、同位体の数が多い元素を担当されたにもかかわらず、一番早く結果を出すと共に評価レポートをまとめて出版された。それもあって、われわれはしばしば彼から尻を叩かれた。とかく拙速という言葉があるが、彼の仕事にはそれは当てはまらず、彼の成果の多くは JENDL-3.2 にも引き継がれている。

彼が JENDL に掛けた気持ちは非常なものがあつた。JENDL の編集グループの中心として評価ならびにテスト結果を吟味し、助言された。成果の PR も重視しておられ、担当外のことでも随分と助言された。例えば、私が担当していた遮蔽のベンチマーク実験解析に関しては、国際会議の発表論文など逐一目を通し、修正頂くとともに、発表の OHP についても非常に分かりやすく直してもらったものである。こうした努力が実って、『JENDL-2 の作成』で昭和 60 年の日本原子力学会の特賞を、菊池さん、中川庸雄氏、松延氏、浅見氏とともに受けることができた。

JENDL-2 の完成後、企画室に移られ、核データセンターとシグマ委員会の活動のため非常に努力された。それもあって、核データの活動に対して幾ばくかの委託費が付き、大学での測定活動やメーカーでの評価活動が促進された。それは、JENDL-3 として花開き、また、三島先生をはじめ原子力界の非常に多彩な人の出席が叶った昨年のシグマ委員会 30 周年の祝いにつながった。今日、欧米に比べて日本の核データ活動が盛んなのは、こうした予算の裏付けが寄与しているものと思われる。また、NEANSC や IAEA の会議においては、日本の代表として率直に意見を述べ、シグマ委員会活動と JENDL に対する国際評価を高めていることは、言うまでもない。同席した会議としては、1990 年 12 月の NEANSC の核データ国際協力事業の特別会合（パリ）、1992 年の IAEA 主催の FP 核データの専門家会議（原研：議長菊池さん）などがある。会議での積極的な発言はもちろん、会食でも盛んにユーモアを交えてスピーチの中心になっておられた。私は、FP 核データの専門家会議については、副議長に選んでいただき貴重な経験がで

きた。

菊池さんとは、良く飲み、良く語った。その多くはWG会合の後であり、東海や新橋の行きつけの飲み屋で、また阿漕が浦公園の花見の宴で口角泡を飛ばして議論したことを思い出す。1979年のノックスビルでの核データの国際会議の折り、菊池さんと高野さんと3人で、ホテルの近くのバーに入った時のことである。われわれは、銘々がまずカクテルを一杯ずつ飲んだ後、ビールを注文することになった。メニューにはピッチャー24(?)オンスとあったのだが、どれくらいの量か分からないので、「3ピッチャーズ」と頼んだ。それを受けた美女が澄ました顔で奥に取り次いだ。そして、にっこりと笑って大きなグラスに注いだビールを3つ持ってきた。その量たるやバケツ並みといったらよいでしょうか。でも、注文した以上は飲み干さねば日本男児の名が廃ると言いつつ、3人とも空にした。あの頃が一番飲めた時期だったのかも知れない。

また、彼は音楽、とりわけワーグナーの歌劇を愛した。ある時は、独身寮の部屋で、取っておきのワインやウイスキーを傾けながら、結婚後は、自宅に時々寄せて頂いて、防音装置を付けた彼の書斎兼音楽視聴室で耳を傾けた。1990年秋にブタペストでのモンテカルロ法の国際会議の前にウィーンのIAEAに菊池さんと訪問した。その前日の日曜日、彼は中川正幸さんと私にウィーンで会うとすぐにチケット屋に行き、オペラ座の講演切符3人分を交渉し、舞台に近い上席の切符をたちまち手に入れてくれた。おかげで、私は、はじめてオペラを直に鑑賞することができ、その夜のレストランでの食事とともに、今も楽しい思い出として記憶している。

家庭では、奥さん、お嬢さんそして愛犬(コリー種)とともに過ごされていた。彼は、奥さんに対しては多少わがまま(亭主関白)だったかも知れないが、お嬢さんには、東京出張の際必ずシュークリームを買って帰ってくるなど優しい父親であったと思う。その優しさは、朝晩散歩に連れられたおとなしい犬に移っていたのかも知れない。以前は、健康増進のためといって昼休みに虚空蔵尊の裏の砂浜から阿漕き裏公園のグランドを通過してのジョギングをやらせられ、私も時々つきあった。それが、企画室勤務以降はできなくなってしまったようだ。2年ぐらい前に愛犬を亡くしてからは、日課の散歩も途絶えてしまった。酒も、「今回はドクターストップが掛かっているから控えなくっちゃ」という言葉が時々発せられるようになった。その頃から病魔が頭をもたげていたのかも知れない。そうは言いながらも我々と酒席で歓談して頂いたのは1度や2度ではない。実現しなかったがデータセンター構想への思い入れもよく聴いた。シグマ委員会活動を含めたデータやソフトウェアが軽視されがちなことに対しては義憤を漏らされていた。核データセンターの室長として戻られてからは、核データセンターをアジアの地域センターとして育てるため、また、世界の核データ活動の再興を懸けて、うるさ型の多いシグマ委員会をリードし、また、国内外を本当に忙しく飛び回っておられた。そして、海

外の研究者を核データセンターに受け入れ、アジア地域との技術者の交流を計り、また、恒例の核データ研究会では国際セッションが定常化されるに至った。恐らくは、彼の足跡、彼が書いた論文と報告書の量は、常人の我々がこれからも含めて達成する量をはるかに越えているものと考えられる。これらの無理がたたってか、その志半ばにして突然に倒れられた。実に得がたい人を無くしたという感で一杯である。公私に渡って受けた故人ならびに御家族の恩顧に改めて感謝したい。この上は、JENDL-3のFPの評価レポートを書き上げ、まだ完成していない仕事を一刻も早く完成し、アジア地域センター設立に貢献することが、せめてものその恩顧に報いることができる事だと思いつつ筆を置く次第である。

核データ評価研究の牽引車

(株) 日立製作所 電力・電機開発本部
瑞慶覧 篤

平成6年9月、核データ・センター室長菊池 康之氏が亡くなられたとの報に接し、ご生前格別のご親交を賜わった者として、深い悲しみに胸をふさがれる思いでございました。友人にご様子を伺い再度お見舞い申し上げますにしておりますが、時すでに遅く、急逝の報せに接しようとは、悔やまれてなりません。神は、前途に大活躍を渴望された者を、予告なく、天に召してしまうものであり、悔涙の極みであります。この度、在りし日の思い出やご功績を偲んで追悼集を掲載される事は、菊池氏に対する限りない追慕と哀惜の表れと存じます。

顧みますと、菊池さんと知り合ったのは、大学院生時代の学位論文をお書きになっておられた頃でした。論文のコピーは私の蔵書の一部に備えてあります。論文(1969)を繙いてみますと、ここには、チャンネル理論に基づく核分裂幅のスピン効果が詳細に述べられております。特に、Pu239核分裂幅のスピン依存性を考慮すると、核分裂幅が顕著に大きくなる事が指摘されております。原子核の核分裂が発見されてから今年で59年目ですが、核分裂研究は核の変形が主役を演ずる難解な分野で、未だに完璧な理論構築に至っていない。あの頃に、分裂核のスピンが核分裂断面積に与える効果を研究され、先駆的な成果を得ておられます。さらに、これが原子炉物理に及ぼす効果にまで考察を広げ、核分裂幅のスピン依存性を考慮すると、高速炉の負のドップラー反応度が約10%程度大きくなる点に深く言及されております。当時は高速炉が「夢の原子炉」の時代で

したし、ボイド反応度と競合するドブラー反応度の計算精度が特に注目された頃でした。高精度化の要求は今日でも変わっていません。従って、このご研究は遙に時代を先取りしたものと言えるでしょう。

菊池さんは、大学院をご卒業後、直ちにフランスの Saclay 研究所に活躍の場を構えたと記憶しております。この頃に修得したフランス語は流暢で、英仏両刀使いを演じておりました。クラシック音楽をこよなく愛され、特にワグナーが好きだったとのことでした。私の知る限りでは、オペラ曲も好きで、ご自宅では市販されはじめたばかりのビデオに長時間オペラを録画しておられたのが忘れられません。菊池さんは、生涯クラシックを友として、お過ごしになったのでしょうか。告別式での菊池さんが好きだったワグナーの名曲は、人生のはかなさを悔やんでいるような静かな趣の中に、在りし日の菊池さんが偲ばれて、目頭が熱くなりました。

核データセンター室長時代の菊池さんは、核データ評価研究の国際化と活性化に心血を注いでおられました。室長就任以前には、核分裂生成物の断面積評価に立派な功績を残され、最近の実験データを取り入れた現在進行中の再評価研究の基礎をなしております。室長になられてからは、核データ研究の活性化の一端として、ロシアとの共同研究計画・管理、アジア圏の研究支援にと、頻繁に海外を飛び回っておられました。超ウラン元素に関するロシアでの研究成果は評価を受け、仕事半ばで亡くなられた事に対して大変残念がられ、その後の成り行きにご心配の方々が多くおられます。入院直前も中国からの出張帰り、体調が思わしくないと、心配そうに話しておられましたが、私共は、軽い食あたり程度にしか考えず、深刻には受け止めておりませんでした。これが菊池さんとの永遠の別れにつながろうとは、誰が予想したでしょう。今となっては、あれが神のお告げだったのかと悔やまれてなりません。

菊池さんは、ご自分の主張をはっきりとおっしゃる方でしたから、国際的なやり取りでも、対等にやり合った事でしょう。今日の核データセンターは、世界の3極の1角をなし、世界的にも注目されておりますが、これも菊池さんをはじめ、核データセンターの多数の優秀な方々が先頭に立たれ、ご支援頂いた賜物であります。特に、菊池さんの頃は、世界の核データ研究の過渡期にあり、諸外国との調整に大変ご苦労されておられました。心労の程はひしひしと感じとれましたが、大任の重圧を跳ねのけ、日々奮闘されておられたお姿に敬服いたしておりました。菊池さんの急逝は、この大事な時を乗り切る大変重要な人材を亡くしたことになり、国内・外に多大な損失となっております。

菊池さんは、親しく語り合うことが好きで、しばしば呼び込まれて話し込んだり、出張土産のドリアンで珍味の試食やら、強烈な刺激臭にどれ程堪えられるかをテストされた事もありました。さらに、酒宴好きで、幾度となく杯をあげながら、親しく語りあったものでした。北海道での学会では、隣り合ってジンギスカン鍋を突きながら、ビール

ジョッキーの数を競ったものです。”康之”は肩を叩きながら飲める親愛なる友でした。親しき友の急逝に、なんとも言えぬ無念さを禁じ得ません。

菊池さんは、音楽だけでなく、あらゆる分野で高い見識と教養をお持ちの方でしたし、全てに真剣に取り組む情熱家でもありました。常に真心を尽くされる誠実なお人柄に、常々深い感銘を受けておりました。

その親しきお姿に再び接することができないのは、誠に悲しく残念なことでありますが、菊池さんが心血を注いで来られた日本の核データ研究も、世界の3大評価済み核データファイルを世に送り出すに至り、その成果は輝かしいものがあります。菊池氏の功績と針路は、長谷川新室長をはじめ、優秀な研究室のメンバーにしっかりと受け継がれ、今後共一致協力して邁進されるものと確信致しております。

どうぞ心安らかにお眠りください。ご生前に賜りました核データ研究へのご功績とご厚情に心から感謝申し上げ、慎んで追悼の言葉とさせていただきます。

国際人、菊池康之さん

武蔵工業大学

吉田 正

数年のあいだに、三人の敬愛する先輩を、年来の友人を、そして母を失った。人は、ときに、彼（あるいは彼女）は世を去ったけれども、いまも我々の心の中で生き続けている、という。この頃、この言葉が、比喩や常套句以上のなにもものかを含意していて、けっして単なるレトリックに終わるものではないと感じられるようになった。私の場合、もとより、宗教的感情とは言いがたい。残された年月で、自分にあとどれだけのことができるか、そんなふうを考える年齢になってきたことと無関係ではない。

近年、外国での会議には、ほとんどいつも菊池さんと一緒に出席していた。NEANS C評価国際協力の会合、核データ国際会議のプログラム委員会等々。そして、菊池さんの語学力、発言力の陰に隠れて、けっこう気楽にやっていた。若い人々の語学力も向上し、国際会議で日本の立場をはっきりと主張できる日本人はもはや少数派ではない。しかし、会議そのものをリードしてしまう日本人は、菊池さんを措いてあまり知らない。会議が終わり、土地の料理とワインが供され、そして、そこに菊池さんがいればどうなるか。それはもう、ここに書くまでもないだろう。先週、トリエステ核データ会議のプログラム委員会に原研の深堀さんと出席し、一昨日帰国した。そこにもう菊池さんはい

ない。でも、四日後には何事も無かったこのように会議は終わる。

ある日の夕刻、議長の Reffo 氏が気を利かせて、居合わせた何人かを、近くのフェラーラの町に案内してくれた。ライトアップされ、地元の人々にぎわう休日のルネッサンスの古都は、ひとときの夢のように美しかった。帰路、Reffo 夫人の運転する車の助手席におさまり、ぼんやりと、うしろの三人のアメリカ人の会話を聞いているうち眠りにおちた。軽いブレーキの動きで我にかえると、後部座席の会話が耳に入った。どんな言葉使いだったかは覚えていない。「・・・せんじつめればどんな人生を送ったかだよ。キクチは、ワインを、仕事を、人生を、しっかりエンジョイしたんだ」。イタリアの夕闇を疾走する車中の、日本人の存在を全く意識しない外国人どうしの会話。そのなかにも菊池さんはちゃんと生きていた。いかにも菊池さんだな、とそう思いながら、なにか癒された気持ちになり、またまどろんだ。去年の夏、逝去されるほんのひと月まえ、病院を訪ねた私にまでも、いつもの配慮を忘れなかった菊池さん。安らかにお眠りください。ワーグナーを聞くととき、外国での会議で窮地に陥ったとき、そしてなによりおいしいワインを口にするとき、そのたびにきっとあなたのことを思い出すでしょう。

菊池さんを偲んで

(財)原子力発電技術機構
ヒューマンファクターセンター
中川 庸雄

1989年10月のはじめ、私と菊池さんは米国BNLのNNDC（国立核データセンター）にいました。OECD/NEAで核データ評価に関する国際協力を始めるかどうかを議論するためのタスクフォース会合があったからです。NEAデータバンク、米国、日本、ヨーロッパの関係者たちが集まっていました。日本からは、菊池さんと私と当時NNDCに居た深堀氏が参加していました。日本ではJENDL-3がほぼできあがった時期でした。同様に米国ではENDF/B-VI、欧州ではJEF-2をほぼ完成しており、まもなくこれらの最新の評価済核データライブラリーが出そろうという時期です。今後核データ関連の予算や人材が厳しくなる状況が予想されるので、お互いに協力できるところはできるだけ国際的な協力体制を作ってやっていこうというわけです。

この年の9月までは五十嵐信一さんが核データセンターの室長をされていましたが停年で退職され、菊池さんが核データセンターの室長になられたばかりでした。菊池さん

は、室長になられたことと、世界の核データコミュニティの新たな方向への門出と言う二重の意味もあって、大変に張り切っていました。結局、BNLでの会合で核データ評価の国際協力をする事が決まり、次の週にシカゴで予定されていたNEACRP/NEANDCの会合でそのことを報告し承認してもらい、直ちに国際協力をスタートさせることになりました。菊池さんは、10月の会合での情勢の変化に実に的確に対応しているのが極めて印象的でした。当初の予定と異なり、NEACRP/NEANDC会合の後、第1回の核データ評価国際協力ワーキンググループ会合を開くことになり、出張予定を変更して第1回会合に出席されたり、日本が主導権を取れそうなテーマについては積極的にメンバーをノミネートするなどの努力をされました。

あれから7年間、菊池さんは核データセンターの室長として努力してこられました。菊池さんが核データセンターの室長をしていた時期を一言で言うなら、「原研核データセンターと日本の核データが国際化を目指した時期」と言えます。核データ評価国際協力については極めて積極的に対応したし、核融合関連核データライブラリーであるFENDL (Fusion Evaluated Nuclear Data Library) への対応、科学技術庁が進めている近隣諸国の研究者との交流制度での中国、韓国、バングラデッシュ、タイ、インドネシアとの関係、旧ソ連の研究者との交流など、次々と新しい関係が増えて行きました。これに加えて、従来のNEAやIAEAとの関係もありました。この様ないろいろな機会にJENDLを宣伝もしてくれましたので、日本の核データ活動が国際的な舞台で確実に認められるようになりました。今、改めて思い返して見ると、菊池さんの努力があったからこそ世界の核データコミュニティの変化に日本の核データコミュニティが極めてうまく対応できたのだと思います。1994年に完成したJENDL-3.2が世界の3大評価済み核データライブラリーの一つであると自他共に認められているのも、菊池さんの努力の賜物です。しかし、このような状況で海外出張の機会が増え、仕事量も増えたため、菊池さんは体に無理をさせていたのかも知れません。

菊池さんが室長になってから、核データの国際化に対応できた理由の一つに、菊池さんの語学力に負うところが大きかったと思います。菊池さんが、英語はもちろん、フランス語も得意だったことは菊池さんを知っている全員が認めるところです。英語すら満足にできない私にとっては菊池さんの語学力は羨望的でした。私は、2年前に科技厅の近隣諸国の研究者との交流制度の一環として韓国原子力研究所(KAERI)を訪問したことがあります。その時、KAERIの研究員にハングル文字の読み方を教わりましたがなかなか覚えられずにいると、「菊池さんはすぐにハングル文字が読めるようになったよ」といわれました。菊池さんも私より1年前にKAERIを訪問していました。そして、その時覚えた読み方をずっと忘れなかったようです。

核データセンターは、原子力開発のための基礎データである核データを整備し、それ

をユーザーに提供するのが使命です。主要な核データのユーザーは何といっても原子炉の設計解析の分野です。炉物理を良く知っている菊池さんは、どのようなデータを重点的に改良整備すべきかを的確に判断できました。まだ問題があるとは言え、JENDL-3.2 がかなり良く積分テストを満足するライブラリーになれたのも、JENDL-3.2 のための主要データの改訂作業において菊池さんの強力な指導があったからだと思います。それでも、まだ、 ^{233}U の問題などついに解決できなかったモノがあり、今後の JENDL の改良が期待されてはいます。常にデータの改訂が必要なのは、JENDL の宿命と言うものです。

原研核データセンター及び日本の核データコミュニティが向かう将来の方向として、「荷電粒子」、「高エネルギー」という2つのキーワードがあります。いずれも、原研の大強度電流陽子加速器に代表される加速器開発のために必要になるデータです。この加速器の利用分野の一つとして、今後ますます重要になるであろう原子力プラントからの廃棄物の処理があります。20 MeV 以下の中性子核データを目指した従来の方向から、「荷電粒子」と「高エネルギー」を目指した新しい方向に核データセンターを変えたのも菊池さんでした。

私は昨年4月から原子力発電技術機構に Outreach、Human Factor Center に所属しています。仕事上必要なので三隅二不二氏のリーダーシップに関するPM論の本（リーダーシップの科学、ブルーバックス、講談社）を読みました。PM論のPはPerformance、MはMaintenanceの頭文字で、それぞれ「集団における目標達成や課題解決に関するリーダーシップ」、「集団の維持に関するリーダーシップ」を表します。前者は、仕事の内容を良く理解し、部下に対して適切な指示ができる能力であり、後者は、部下との話し合いを十分に持ち、組織の人間関係を維持する能力です。それぞれの能力が強いか弱いかを大文字と小文字で表現して組み合わせると、リーダーをPM、Pm、pM、pmの4つのグループに分類できます。どのグループに属する人が良いとか悪いとかを決めつけることは絶対にできないのですが、誰もが想像する通り「PM型の人」が、リーダーとしては最も適当だそうです。私はこの本を読んで、菊池さんはPM型だと直感しました。菊池さんが「P」であることは誰もが認める所です。核データと炉物理に関する確かな知識が日本の核データのレベルを国際的に高い位置に引き上げてくれました。「M」であることも、毎年夏に室員を勝田のお宅に招待してくれてバーベキューをし、核データセンター内の「和」を大事にしてくれたことを見れば納得できます。そして、PM型の菊池さんの影響は、核データセンターはもとより、シグマ委員会、さらには世界の核データコミュニティにまで強く及んでいました。

20 MeV 以下の中性子核データに関しては JENDL-3.2 が完成したとは言え、決して100点満点の核データライブラリーができたわけではありません。既に問題点が指摘さ

れていますので今後の継続的な改良が必要です。「荷電粒子」、「高エネルギー」に至っては、「2~30年かけてやっと到達できた JENDL-3.2」の規模を遥かに凌ぐ規模の核データ整備が必要です。インターネットが普及し世界の核データがパソコンの中で繋がってしまった今、国際協力はますます重要になるでしょう。国際協力で何をどう分担してやっていくのか、今後の議論が必要です。菊池さんの指導力に期待せねばならないことはまだまだたくさん残されていたのです。まだまだ先が不透明な時点で菊池さんが他界されたことは、原研核データセンターのみならず世界の核データコミュニティーにとって大きな痛手となりました。

今までの菊池さんの努力に対し改めて敬意を表すると共に、ご冥福をお祈りします。

